

【一】

次の文章を読み、後の問いに答えよ。

見える人と見えない人の空間把握の違いは、単語の意味の理解の仕方にもあらわれてきます。空間の問題が単語の意味にかかわる、というのは意外かもしれませんが、けれども、見える人と見えない人では、ある単語を聞いたときに頭の中に思い浮かべるものが違うのです。

たとえば「富士山」。見えない人にとって富士山は、「上がちよつと欠けた円すい形」をしています。いや、実際に富士山は上がちよつと欠けた円すい形をしているわけですが、見える人はたいいていそのようにとらえていないはずで

見える人にとって、富士山とはまずもって「八の字の末広がり」です。つまり「上が欠けた円すい形」ではなく「上が欠けた三角形」としてイメージしている。平面的なのです。月のような天体についても同様です。見えない人にとって月とはボールのような球体です。では、見える人はどうでしょう。「まんまる」で「盆のような」月、つまり厚みのない円形をイメージするのではないのでしょうか。

三次元を二次元化することは、視覚の大きな特徴のひとつです。「奥行きのあるもの」を「平面イメージ」に変換してしまう。とくに、富士山や月のようにあまりに遠くにあるものや、あまりに巨大なものを見る時には、どうしても立体感が失われてしまいます。もちろん、富士山や月が実際に薄っぺらいわけではないことを私たちは知っています。けれども視覚がとらえる二次元的なイメージが勝ってしまう。このように視覚にはそもそも対象を平面化する傾向があるのですが、重要なのは、^⑦こうした平面性が、絵画やイラストが提供する文化的なイメージによってさらに補強されていくことです。

私たちが現実の物を見る見方がいかに文化的なイメージに染められているかは、たとえば木星を思い描いてみれば分かります。木星と言われると、多くの人はあのマープリングのような横縞よこしまの入った茶色い天体写真を思い浮かべるでしょう。あの縞模様の効果もありますが、木星はかなり三次元的にとらえられているのではないのでしょうか。それに比べると月はあまりに平べったい。満ち欠けするという性質も平面的な印象を強めるのに一役買っ

ていそうですが、^⑧なぜ月だけがここまで二次元的なのでしょう。

その理由は、言うまでもなく、子どものころに読んでもらった絵本やさまざまなイラスト、あるいは浮世絵や絵画の中で、私たちがさまざまな「まあるい月」を目にしてきたからでしょう。紺色の夜空にしつとりと浮かびあがる大きくて優しい黄色の丸——月を描くのにはふさわしい姿とは、およそこうしたものでしょう。

こうした月を描くときのパターン、つまり文化的に醸成された月のイメージが、現実の月を見る見方をつくっているのです。私たちは、まっさらな目で対象を見るわけではありません。「過去に見たもの」を使って目の前の対象を見るのです。

富士山についても同様です。風呂屋の絵に始まって、種々のカレンダーや絵本で、デフォルメされた「八の字」を目にしてきました。そして何より富士山も満月もエンギモノです。その福々しい印象とあいまって、「まんまる」や「八の字」のイメージはますます強化されています。

見えない人、とくに先天的に見えない人は、目の前にある物を視覚でとらえないだけでなく、私たちの文化を構成する視覚イメージをもとらえることがありません。見える人が物を見るときにおのずとそれを通してとらえてしまう、文化的なフィルターから自由なのです。

つまり、見えない人は、見える人よりも、物が実際にそうであるように理解していることになります。模型を使って理解していることも大きいでしょう。その理解は、概念的、と言ってもいいかもしれませんが。直接触ることのできないものについては、辞書に書いてある記述を覚えるように、対象を理解しているのです。

⑤ 定義通りに理解している、という点で興味深いのは、見えない人の色彩の理解です。

個人差がありますが、物を見た経験を持たない全盲の人でも、「色」の概念を理解していることがあります。「私の好きな色は青」なんて言われるとかなりびつくりしてしまうのですが、聞いてみると、その色をしているものの集合を覚えることで、色の概念を獲得するらしい。たとえば赤は「りんご」「いちご」「トマト」「くちびる」が属していて「あたたかい気持ちになる色」、黄色は「バナナ」「踏切」「卵」が属していて「黒と組み合わせるとケイコクを意味する色」といった具合です。

ただ面白いのは、私が聞いたその人は、どうしても「混色」が理解できないと言っていたことでした。絵の具が混ざるところを目で見たことがある人なら、色は混ぜると別の色になる、ということを知っています。赤と黄色を混ぜると、中間色のオレンジ色ができあがることを知っています。ところが、その全盲の人にとっては、色を混ぜるのは、机と椅子を混ぜるような感じで、⑥ どうもナツトクがいかないそうです。赤＋黄色＝オレンジという法則は分かっても、感覚的にはどうも理解できないのだそうです。

もう一度、富士山と月の例に④モドリましょう。④見える人は三次元のを二次元化してとらえ、見えない人は三次元のままとらえている。つまり前者は平面的なイメージとして、後者は空間の中でとらえている。

だとすると、そもそも空間を空間として理解しているのは、見えない人だけなのではないか、という気さえしてきます。見えない人は、⑤ゲンミツな意味で、見える人が見ているような「二次元的なイメージ」を持っていない。でもだからこそ、空間を空間として理解することができるのではないか。

なぜそう思えるかという点、視覚を使う限り、「視点」というものが存在するからです。視点、つまり「どこから空間や物を見るか」です。「自分がいる場所」と言ってもいい。もちろん、実際にその場所に立っている必要は必ずしもありません。絵画や写真を見る場合は、画家やカメラが立っている場所の視点を、その場所ではないところにいながらにして獲得します。⑥ケンビキョウ写真や望遠鏡写真も含めれば、肉眼では見ることでできない視

点に立つことすらできます。想像の中でその場所に立つこうした場合も含め、どこから空間や物をまなざしているか、その点が「視点」と呼ばれます。

同じ空間でも、視点によって見え方が全く異なります。同じ部屋でも上座から見たのと下座から見たのでは見えるものが正反対ですし、はたまたノミの視点で床から見たり、ハエの視点で天井から見下ろしたのでは全く違う風景が広がっているはず。けれども、私たちが体を持っているかぎり、一度に複数の視点を持つことはできません。

このことを考えれば、目が見えるものしか見ていないことを、つまり空間をそれが実際にそうであるとおりに三次元的にはとらえ得ないことは明らかです。それはあくまで「私の視点から見た空間」でしかありません。

——伊藤亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』より（一部省略）——

問一 傍線部(b)(c)(d)(e)のカタカナを漢字に改めよ。

問二 カタカナを漢字に改めたときに傍線部(a)(f)と同じ漢字を含む熟語として最も適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、番号で答えよ。

- | | | | |
|---------------|----------|----------|-----------|
| (a) ① コウキシン | ② ギレイテキ | ③ ムカシカタギ | ④ ホッキニン |
| (f) ① ケンシュウセイ | ② ジツタイケン | ③ ケンザイカ | ④ サイケンショウ |

問三 傍線部(7)が指していることに最も合致するものを次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- ① 富士山と言えば、まず最初に「上が欠けた三角形」をイメージする。
- ② 月という言葉から盆のような厚みのない円形を思い浮かべてしまう。
- ③ 非常に遠くから富士山を眺めると、それには奥行きが感じられない。
- ④ 月は地球上からとても遠くにあるために、その存在を実感できない。
- ⑤ 木星は、縮模様がなければ立体的ではなく平べったく見えるだろう。

問四 傍線部①の問いに自ら答えることで、筆者が示そうとしていることは何か。それに当たる部分を本文中から探し、最初と最後の五文字を書け。

問五 傍線部②であることによって、対象の把握のしかたはどのようなものか。本文に即して二十五字以内で書け。

問六 傍線部③にある「見えない人の色彩の理解」とはどのようなことか。本文に即して五十字以内で書け。

問七 傍線部④で、筆者は「見える人」と「見えない人」の何の違いについて述べているのか。それを表している部分を本文中から五文字以内で抜き出して書け。

問八 本文全体を通して傍線部⑤の見解を導き出す上で、筆者が根拠としていることを、本文中から二箇所、それぞれ二十五字以内で抜き出して書け。

問九 本文の内容に最も合致するものを次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- ① 月はボールのような球体であると知っていても、それを見る人が平面的なイメージを持ってしまうのは、もっぱら文化的なイメージの働きによるものである。
- ② 見えない人が「富士山」と聞いて立体的なものを思い浮かべるのは、文化的に醸成された富士山の二次元的なイメージを三次元に変換しているからである。
- ③ 見えない人が二次元的なものを三次元的なままにとらえることができるのは、視覚にたよらず、文化的な視覚イメージを通さずにとらえているからである。
- ④ 見えない人が「混色」を感覚的に理解するには、赤と黄色を混ぜると中間色のオレンジ色ができあがるといった事実を知っている必要がある。
- ⑤ 絵画を見る場合には画家の立っていた視点を獲得するが、ケンピキョウ写真や望遠鏡写真のような肉眼で見ることができないもの場合には視点を獲得できない。

【二】

次の文章を読み、後の問いに答えよ。

高円寺北口商店街は秋である。

街灯にセルロイドの紅葉が咲き、十一月の風に吹かれてぺらぺらと音を立てる。

お歳暮シーズンにはまだ間があるうえ、秋の^③コウラクで休日の人出ももうひとつ勢いが足りないこの季節が、じつは江州屋乾物店の書き入れた。店売りはパツとしないが、得意先の結婚式場「小津会館」へ納める引出物の売上げがすごい。九月の半ばから十一月のはじめまで、仏滅をのぞいて一週間に少なくても百本、多い時には三百本も出る。一本五百円として、平均で一週間十万円、月にすると四十万円もの売上げになるのだ。

正一はこの季節が好きである。夜、店を閉めてから家族総出で^⑦明日届けるかつを節を化粧箱に詰めたり、包装したりしていると、「商売も悪くないな」という気分になってくる。

「桐箱^{きりばこ}は一本詰め、四十八箱」

「名前は」

「杉本、伊保田」

①「杉本が右だね」

「そう。それから、化粧箱に上二本詰めが三十箱と七十六箱。三十箱が山賀、阿佐貫」

「阿佐貫って、五丁目の阿佐貫さんとかしら」

「上の息子だね、きつと」

「だとすると、婿^{むこ}さんが阿佐貫でしょ。ねえ、おとうさん、阿佐貫、山賀じゃあないんですか」

「いや、支配人さんのメモじゃ山賀、阿佐貫になってるがなあ」

「熨斗紙^{のし}に書く前に確かめといたほうがいいですよ」

「そうだな。支配人さん、まだ事務所にいるはずだから、電話してみよう」

ふだんは夕飯が済むとそのままゴロリと横になってテレビを^⑤観るか、高円寺南口「八木洋服店」のおやじに無理をいって仕立てさせた毛織のルパンカデめかしこんで外へ飲みに行ってしまう父親が、この季節ばかりは紺の前掛けもはずさないでこまめに口とカラダを動かす。こんな時間まで小津会館のために働いているのだということを支配人に伝えようと、いそいそと茶の間のガラス戸を開けて^⑥チヨウバの電話のダイヤルを回しはじめる。

父親の開けたガラス戸から店の冷たい空気が入ってきて、正一は首をすくめた。

かつを節やら、化粧箱やら、詰め物にするしゃりしゃりもわもわしたセロファン屑やらで、六畳の茶の間は足の踏み場もない。

火の入らないコタツに膝をもぐり込ませたばあさんが、ゆつくりゆつくりと墨をする。そのとなりで母親が熨斗紙の枚数を勘定している。

出産祝いや建前につかう蝶結び、結婚式のときの紅白の結び切り、不祝儀用のねずみ色のと、江州屋乾物店で使う熨斗紙は、商店街からちよつと入った路地にある「アート社」という印刷会社で作った特製の。文房具屋からまとめて仕入れれば安く上がるが、紙が洋紙で墨の吸い込みが悪い。その点、アート社で拵えたやつはちゃんとした鳥の子だから、ばあさんの書く字もなかなか立派に見えた。熨斗紙は一枚五円、失敗できる値段ではない。そんなことも、正一には誇らしく思えてくる。

「そうそう、昼間、植松化粧品店の奥さんが挨拶に見えましたよ。おばあちゃんにもよろしくって」

数え終わった熨斗紙の端をトントンとそろえると、母親が言った。

長いこと空き店になっていた江州屋乾物店の左隣に、駅前前の植松化粧品店が改装工事のあいだけ仮店舗を出すことになり、工事が始まったのは二週間前のことだ。

仮店舗にしては大がかりな工事で、テント地の囲いの中から夜の九時、十時まで金づちの音が聞こえる日もあった。

「じゃあいよいよ開店に漕ぎつけたんだね」

「明日からですって。羊羹を置いていきましたよ、とらやの」

(中略)

正一は父親から儲け率と言うのをよく聞かされる。たとえば、江州屋乾物店の店売りでいちばん儲かるのは花かつをと、粉かつをである。三割儲かる。だがその花かつをや粉かつをだつて、知り合いの卸問屋から取れば一割五分の儲けにしかない。朝早くからかつを節をふかして、そのふかしたかつを節を削り機械でたつぷり時間をかけて削り、最後にふるいに削ったかつををいれて細かくしてやつと一割五分が三割になる。儲けを一割五分増やそうとすれば、これだけ手間暇をかけなければならぬわけである。

桜海老は江州屋乾物店でビニール袋に小分けパックして二割。するめは二割五分。鱈の開きは三割儲かるが、売れ残って売り物にならない分を勘定に入れると二割五分。砂糖なんぞは一割にもならないし、こんぶも二割で、煮干しも二割弱、高野豆腐で一割五分、小豆は二割で、他の豆類はちよつと低い一割七分。缶詰にいたつては一割で、おまけに客によっては缶にちよつとでもデコボコがあると値段をまけろという。こうなると、一個売つて一円か二円しか儲からない卵と、儲け率はトントンだ。

とにかく、江州屋乾物店に並んでいる品物で四割儲けの商品なんぞひとつもないのである。

湿気に対していつも神経を尖らせていなければならぬ商品管理の大変さを考えれば、四割とは言わなくてもせめて三割か三割五分の儲けでもおかしくはない、と父親はしじゅう愚痴っていた。

それだけではない。父親がいちばん我慢できないのは、客が落とす金額の小ささだった。

「百円のもの売っても、一万円のもの売れる店と同じに、「いらっしやいませ」^㉑「ありがとうございます」^㉒だ。冗談じゃない。百円の魅ひと袋でウチに入るのは十五円、店の電気代やら乾燥剤やらの経費を差引いたら十円しか残らない。え、正一、十円だぞ。今どき乞食^{こじき}だってたった十円じゃあいい顔はしないだろうよ」

話の終わりに、父親がかならず怒ったような口調でそうつけ加えるのを聞くたびに、正一は悲しくなった。父親を怒らせるものはこの乾物屋^㉓という商売だった。

しかし、小津会館へ納めるかつを節のおかげで、この季節だけは父親の口から儲け率の話は出ない。

茶の間のガラス戸がガラリと開いて、父親がニコニコしながら戻ってきた。

「おい、やっぱり五丁目の阿佐貫さんだそうぞ。婿さんのほうが阿佐貫だ。支配人さん恐縮しちゃって大変だったぞ。おかげで助かった、やっぱりお宅に頼めば安心だった」

大威張りでそう言うと、父親はコタツの上のメモの名前を赤鉛筆で^㉔勿体ぶつて入れ替えた。

「これで気がつかなかったら、明日の今ごろは支配人さん、首が飛んでたかもしれない。まあ、首は飛ばなくても、大騒動は間違いなしだ。江州屋さん、恩に着るよ、借りができちゃったねえって言われたぞ」

「まあ」

「^㉕こういう気の効かせ方はウチじゃなきゃできないなあ」

江州屋乾物店では、この前の冬、日本橋のかつを節の老舗^㉖「やまふじ」^㉗に小津会館をとられそうになったことがある。父親の言葉には、あのときのシヨックをまだ忘れきっていない、皮肉っぽいような、恨みがましいような響きがあつてドキッとさせられた。

たぶん母親もそれに気づいたのだろう。

「お茶にしましょうか、おとうさん。植松化粧品店の奥さんから、とらやの羊羹頂いたから」

父親をあやすような口調で言うと、膝^㉘についてのセロファン屑^{くず}を払いながら立ち上がった。父親は甘いものに目がない。

「ほう、とらやか。久しぶりだな」

「明日から開店ですって。今夜はトツカン^㉙工事になるので、お騒がせしますって」

「そうか。お前、あとで工事の人にお茶を出してやったほうがいいんじゃないか。植松の奥さんも、駅前のお店からお茶を運ぶんじゃないや大変だろう」
 「そうですね。二カ月だけといったって、お隣どうしですものね……はい、どうぞ」

厚く切った羊羹ののった皿を、母親がコタツのうえに置いた。正一は端の一切れをつまむと、ひんやりした甘味を噛みしめた。はじめて食べる贅沢ぜいたくな味がした。

——ねじめ正一『高円寺純情商店街』より——

(注1) 鳥の子……鳥の子紙という和紙の一種。

問一 a) く f) のカタカナを漢字に書き改め、漢字には読みがなをつけよ。

問二 傍線部㉗は(1)どこに届けるもので(2)何として使われるものか。本文中の表現を用いて答えよ。

問三 傍線部㉘とは具体的にどういうことか。簡潔に説明せよ。

問四 傍線部㉙の理由として適切なものを次のなかから二つ選び、番号で答えよ。(順不同)

- ① 熱心に働くふりをして支配人にアピールしたいから。
- ② 手間をかけてでもかつを節の儲け率を増やしたいから。
- ③ 江州屋乾物店において最も利益があがる時期だから。
- ④ 毛織のルパシカを着て外へ飲みに行くのが好きだから。
- ⑤ 十一月の風は冷たく、こまめに動かないと寒いから。
- ⑥ 儲け率の低い商売に対する日頃の不満がなくなるから。

問五 傍線部㉚はなぜか。三十字以内で説明せよ。

問六 傍線部㉛とはどういうことか。簡潔に説明せよ。

A1 国

問七 傍線部①とは具体的にどういふことか。四十字以内で説明せよ。

問八 傍線部②とはどういふことか。簡潔に説明せよ。

問九 傍線部③とは具体的にどういふことか。簡潔に説明せよ。